

裏切りのパン、哀しみのパン

—— アシヌウ (キプロス)、パナギア・フォルビオティッサ聖堂聖域の装飾プログラム ——

益 田 朋 幸

キプロス島西側を占めるトロオドス山脈には、ビザンティン、ポスト・ビザンティンのフレスコ壁画を有する聖堂が点在する。そのうちの十が世界遺産に指定され、訪れる観光客も少なくない。最高峰オリンポス山の北東麓に位置するニキタリ Nikitari は人口500に満たない村で、その5キロほど郊外に建つアシヌウ Asinou のパナギア・フォルビオティッサ Panagia Phorbiotissa 聖堂が本稿の対象である。当初はフォルビア修道院の主聖堂であつたが、附属する建造物は残っていない。修道院名は、フォルビアなる乳の出をよくするハーブに由来するという。女性の参拝客を集めたことであろう。

聖堂建築と壁画は、複雑な段階を経ている。当初聖堂は、キプロスの聖堂建築によくあるようにナルテクスをもたない単廊式バシリカの形式を採り、^{マギストロス}宮廷長官ニキフォロス・イスキリオス Nikephoros Ischyrios によって12世紀初頭に創建された。フレスコの奉献銘によれば1105/06年のことである。ビザンティン皇帝アレクシオス1世コムニノス(位1081-1118年)はセルジューク朝やエルサレム王国に相對するために、軍団をキプロスに駐屯させ、また Kykkos 修道院にも大きな寄進を行なった⁽¹⁾。その結果、1100年前後には多くの画家が首都コンスタンティノポリスからキプロスに招かれて仕事をした。キプロス島はこの時期、美術史上の黄金期を迎えるのである。

12世紀前半(1115年以降)には、南北にアプシス状の突出部を有し、天井に^{ドラム}鼓胴部のない浅いドームを戴くナルテクスが追加された。その後、13世紀(1227年以降)には、地震による崩落を補ってアプシスのコンクが再建され、ナオスには肋骨ヴォールトやバットレスによって補強がなされた。

フレスコの段階はさらに込み入っている。創建当初(1105/06年)のフレスコは、アプシスのコンクを除く^{ベニマ}聖域と、ナオス西側(2本の肋骨ヴォールトによって三分されるうちの西側のベイ)、ナルテクス東壁(当初の聖堂入口)扉口上リユネットの聖母子像【図1】である。1180年頃にはナルテクスの南アプシス開口部が埋められて、騎馬の聖ゲオルギオス像が描かれた。地震後の修

(1) キコス修道院と「キコスの聖母」アイコンについては、以下の拙稿参照。『ビザンティン聖堂装飾プログラム論』中央公論美術出版、2014年、第23章「『パナギア・キコティッサ』アイコンと聖堂装飾」。



図1 ナルテクス東扉口上、聖母子

復による13世紀末のフレスコは、アプシス・コンクのオランスの聖母と二大天使、コンクを囲む弧状壁面の「イサクの犠牲」、ナオスのペテロとパウロ、ナルテクスの聖アナスタシア等である。1332/33年にはナオスの大半の壁面が描き直された。これに加えてナオスには14世紀、16世紀の壁画も残っている⁽²⁾。

壁画の記述

建立当初のフレスコは、聖域以外にもナルテクス東壁扉口上とナオス西側に残っている。前者は当初の聖堂入口を飾っていたもので、オランスの聖母胸像に幼子イエスのメダイヨンが浮かび、「神の母フォルビオティッサ」との銘が付されている（所謂ブラケルニティッサ型の上半身）⁽³⁾。後者は西壁、大画面の「聖母の眠り」を中心に、「ラザロの蘇生」「エルサレム入城」「最後の晚餐」「洗足」「聖霊降臨」「セバステの40人殉教者」「聖十字架を手にするコンスタンティヌスとヘレ

(2) A. and J.A. Stylianiou, *The Painted Church of Cyprus*, London 1997 (1964); M. Sacopoulou, *Asinou en 1106, et sa contribution à l'iconographie*, Brussels 1966; A. Guiglia Guidobaldi, s.v. "Asinou," *Enciclopedia dell'arte medievale*, pt. 2, 1991 (http://www.treccani.it/enciclopedia/asinou_%28Enciclopedia-dell%27-Arte-Medievale%29/ accessed 30 Oct., 2021); Ch. Hadjichristodoulou, D. Marianthefs, *The Church of Our Lady of Asinou*, Nicosia 2002; A.Weyl Carr, A. Nikolaidès (eds.), *Asinou Across Time: Studies in the Architecture and Murals of the Panagia Phorbiotissa, Cyprus*, Washington, D.C. 2013. スティリアヌウ夫妻の著書は、キプロスの聖堂壁画を網羅する基本文献。サコプウロは1105/06年のオリジナル壁画の図像学的研究。ハジクリストドゥルウらの小著は、モルフウ主教区による「キプロスのビザンティン・モニュメント案内」の一冊。カーらのモノグラフは建築・銘文・技法・図像学を網羅する大著であるが、遺憾なことに12世紀初頭のフレスコには触れない。日本語の文献としては、以下がある。櫻井夕里子「パナギア・フォルビオティッサ聖堂（キプロス島アシヌウ）西壁の装飾プログラム」『國學院雑誌』108-8 (2007.8), 18-32; 馬場恵二「キプロス島アシヌウ聖母教会堂と『キリスト再臨図』」『ヨーロッパ 生と死の図像学』（明治大学人文科学研究所叢書）東洋書林、2004年（筆者による書評、林雅彦編『「生と死」の東西文化史』（明治大学人文科学研究所叢書）、方丈堂出版、2008年、376-85、を参照）。

ナ」⁽⁴⁾と諸聖人のイコン的図像を含む。

本稿の対象である聖域の図像に関して、詳しく記述しよう【図2】。アプシスのコンク（四分の一球形壁面）は13世紀の地震による崩落後、当初よりも内側に造り直され、オランスの聖母立像と二大天使が描かれた【図3】。コンクを囲む弧状の狭い区画には「アブラハムによるイサクの犠牲」が選ばれており、ここにこの図像を置くのは珍しい。しかし祭壇が神に犠牲を捧げる場であることを思えば、プログラム上の意図は納得できる。コンク以外の聖域の図像はすべて12世紀初頭のものである。ベーマの天井ヴォールトは「昇天」であるが、コンクを再建する際に東側四分の一ほどを喰われてしまった。サコプウロのモノグラフは創建当初のフレスコを扱うが、聖域の「受胎告知」と聖母伝2場面は修復前で図像が判別できなかったため、議論の対象となっていない。一方最新のカーらの大著は、創建当初の壁画を除外している。したがって聖域内、創建当初の壁画全体の装飾プログラムは、これまで論じられていないという奇妙な状況が生じている。

コンク下のフリーズには「使徒の聖体拝領」が配される。この部分は崩落を免れ、オリジナルの壁画がほぼ残っている。中央三連アーチ窓の上部に祭壇が描かれ、キリストがその左右に反復される。向かって左はペテロを先頭とする6人の使徒にパンを与える情景であるが、キリストと先頭3人の弟子の頭部は剥落している【図4】。右はヨハネを先頭とする6人の弟子に葡萄酒を与える場面である。キリストは四葉形の口をした壺を傾けて、ヨハネに葡萄酒を飲ませる。使徒は先頭のペテロとヨハネにのみニンブスが与えられ、他の10人にはない。注目すべきは右端の弟



図2 聖域の図像配置



図3 アプシス、オランスの聖母

- (3) 13世紀末に修復された現アプシスには、オランスの聖母が描かれているが、以下の理由からオリジナルの図像は聖母の胸に幼子イエスのメダイオンがあるもの（所謂ブラケルニティッサ型）であったと考えられる。
- ① アシヌウと同画家の作とされる北キプロス、Trikomoの聖母聖堂アプシスはブラケルニティッサ型聖母子を描く。
 - ② トリコモのアプシスにはアシヌウとほぼ同文の銘が記されており、同図像であった可能性が高い。
 - ③ キプロスの聖堂アプシスにはブラケルニティッサ型の聖母子を描くことが多い。すなわち当初アシヌウでは、アプシスと西扉口上リユネットに、同じイメージが全身像と半身像で反復されていた。A. Weyl Carr, in: *Asinou Across Time*, 217.
- (4) この部分のプログラムに関して、前掲櫻井論文は重要な指摘をしている。



図4 アプシス、使徒の聖体拝領（パン）



図5 アプシス、使徒の聖体拝領（葡萄酒）

子である。独りだけプロフィールで描かれたこの弟子は、キリストに背を向け、右手でパンを食べながら、右脚を高く上げて退場しようとしている【図5】。裏切り者、イスカリオテのユダである。

「使徒の聖体拝領」は「最後の晩餐」を典礼化した主題であるが、イエスは「私がパン切れを浸して与えるのが」（ヨハ13：26）裏切り者だと語り、「ユダはパン切れを受け取ると、すぐに出て行った」（ヨハ13：29）のである。この「最後の晩餐」の説話的細部を「聖体拝領」に採り入れて、ユダを明示した興味深い図像である⁽⁵⁾。「聖体拝領」は弟子たちがキリストからパンと葡萄酒を授かる図像であるから、通常ユダは含まれず、理念的な「十二使徒」が表象される。イコン的であるべき「聖体拝領」に、裏切りのユダを描き込むことによって、説話性を蘇らせたものである。その下、最下部には立像の主教聖者6人、窓の下に胸像の主教聖者2人が描かれる。

「聖体拝領」のフリーズに接する東壁には、左右に分割されて「受胎告知」が配される。ビザンティン聖堂装飾の定型プログラムである。左の大天使ガブリエルは左手に笏を持ち、右脚を大きく踏み出し、右手を伸ばしてマリアに懐胎を告げる【図6】。右の聖母マリアは椅子に坐し、左腿に置いたインク壺様の容器（紡錘の軸受け）に、右手で持った紡錘の軸を近づけている。容器には赤い羊毛が入っているようだ。左手を首のところまで上げて、二つ折りにした帯状の赤い

(5) 「使徒の聖体拝領」におけるユダの神学的位置づけについては、以下参照。G. Sekulovski, “Judas a-t-il sa place dans la composition iconographique de la ‘communion des apôtres?’” in: A. Lossky, M. Sodi (eds.), *Rites de communion. Conférences Saint-Serge LVe semaine d’études liturgiques*, Vatican 2010, 211-26. アシヌウのこのモチーフは、北キプロス、Sychari, Panagia Apsinthiotissa (c.1100) に繰返されるが、壁画の質は劣り、アシヌウを写したと思われる。A. Papageorgiou, *Christian Art in the Turkish-Occupied Part of Cyprus*, Nicosia 2010, 402, fig.1. アシヌウ、Sychariの聖母聖堂、Trikomoの聖母聖堂、Koutsoventisのクリソストモス修道院、同修道院墓地礼拝堂であるPanagia Aphenndrika、Kalianaの聖ヨアキム・アンナ聖堂、MonagriのPanagia Amasgou聖堂、KakopetriaのAgios Nikolaos tes Stegis聖堂（第2段階）は様式、図像ともに似通っており、同一工房、同一画家の可能性が議論されている。しかし全体としてアシヌウに近いプログラムを採る聖堂はない。キプロス島Perachorio, Agioi Apostoloi聖堂、クレタ島Chania県Plemeniana村Metamorphosis聖堂でも、アプシス下の「使徒の聖体拝領」右端に背を向けた弟子が描かれるが、ニンブスを有しており、画家はこれがユダであることを理解していなかった可能性がある。



図6 ベーマ、受胎告知の大天使ガブリエル



図7 ベーマ、受胎告知の聖母



図8 トリコモ、聖母聖堂、受胎告知の聖母

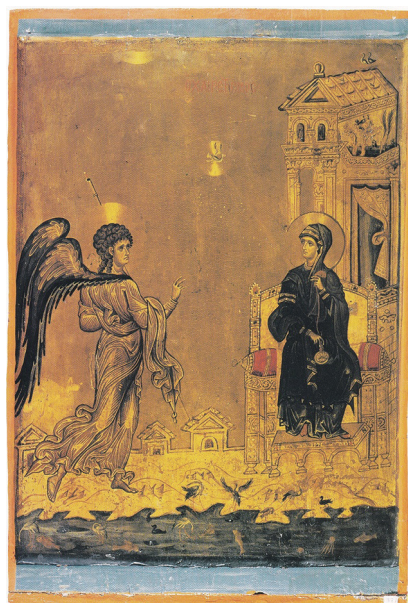


図9 シナイ山聖エカテリニ修道院、イコン「受胎告知」

物体を握っている【図7】。このマリアの挙措に関しては、同一画家が描いたと考えられているトリコモの聖母聖堂「受胎告知」【図8】⁽⁶⁾、及び12世紀を代表する「受胎告知」イコン（シナイ山聖エカテリニ修道院蔵）【図9】⁽⁷⁾を参照しよう。

シナイ山イコンが、羊毛から糸を紡ぐ現実の動作を写實的に描きとっている。マリアは緋色に染めた羊毛の塊を左手で掲げ、指で糸を撚り出してゆく。低く構えた右手は紡錘 spindle を回して、糸に撚りをかけながら巻きとってゆく。紡錘にはかなりの糸がすでに巻きとられている。腿に置かれた円形の物体は、紡錘を円滑に回すための軸受けであろう⁽⁸⁾。12世紀半ばのパレルモ（シチリア）、ラ・マルトラーナ聖堂「受胎告知」にも、ほぼ同じ仕種が確認できる【図10】⁽⁹⁾。ところがアシヌウとトリコモの聖母の仕種は、糸紡ぎの写實的描写として理解するのが難しい。右手の紡錘にはまだ糸が巻きとられていないし、左手の物体と紡錘をつなぐはずの糸も見えない。腿上のインク壺状の物体が紡錘を回す軸受けだとするなら、トリコモでは紡錘と軸受けが接しているが、アシヌウは接していない。左手で掲げる物体も、アシヌウ、トリコモとも羊毛の塊には見えず、二重に折った布か糸の束のようだ。こうした特異な描写が画家の無理解によるものでなければ、図像学上の意味を有していたはずである。

東壁、「受胎告知」の下段にはプロテシスとディアコニコンの機能をもつニッチが穿たれており、その内側の狭い区画に、現実の祭壇を挟むように、エジプトの聖マリア（北）と聖ゾシマス（南）が配されている。マリアは白い蓬髪、白い眉、痩せて皺の多い老年の顔であることが強調される



図10 パレルモ、ラ・マルトラーナ、受胎告知の聖母

(6) Stylianos, 486-91.

(7) このイコンに関する文献は膨大であるが、1点のみ挙げる。K. Weitzmann, "Eine spätbyzantinische Verkündigungssikone des Sinai und die zweite byzantinische Welle des 12. Jahrhunderts," rep. in: K. Weitzmann, *Studies in the Art at Sinai*, Princeton 1982, 271-83.

(8) これまでこの物体は a basket (or more vaguely a 'container') for yarn と記述されてきた。M. Evangelatou, "The Purple Thread of the Flesh: The theological connotations of a narrative iconographic element in Byzantine images of the Annunciation," in: A. Eastmond, L. James (eds.), *Icon and Word: The Power of Images in Byzantium. Studies presented to Robin Cormack*, Aldershot 2003, 266.

(9) E. Kitzinger, *The Mosaics of St. Mary's of the Admiral in Palermo*, Washington, D.C. 1990, 172-75.

【図11】。衣は偏袒右肩の半裸で、腕・胸・背・脚には裸体を隠すための体毛が生えている。両手はゾシマスの方に挙げて、祈っている。対する修道院長ゾシマスは白髪白髯の修道衣、左手に聖体容器を持ち、右手の^{コクリアリオン}（¹⁰）をマリアに向けて差出している【図12】。パンの載ったスプーンの先が臙脂色の画面枠にかかっているので、パンの存在が際立っている。ビザンティン聖堂の聖域には、「受胎告知」と「聖母子」を除く女性の図像がきわめて稀である。アシヌウでは「聖母誕生」と「聖母神殿奉献」というマリア伝2場面が聖域に採用されており、これだけでも例外的なプログラムと言えるが、元娼婦であったエジプトのマリアを、聖女（hosia : hagia に次ぐ位階）とはいえ、この場に描くのは特別なことである。

「受胎告知」の大天使に接する北壁、リュネット状の区画には「聖母の誕生」が描かれる【図13】。左6割ほどを大きなベッドが占め、朱色のマフォリオンをまとった産後のアンナが横たわっている。2人の侍女が食べ物の器を捧げ持つ。右前景には三次元空間への再現が困難なアーチが設けられ、その内側で2人の召使がマリアを産湯に入れようとする。召使の一人は湯の温度を確かめ、もう一人は壺から湯を注いでいるが、この描写は「キリスト降誕」図像のモチーフを流用したものである。アーチの上には同一の建築物上部とも見える棟が建ち、階上の窓からヨアキムの上半身がのぞいている⁽¹¹⁾。



図11 ベーマ、エジプトの聖マリア



図12 ベーマ、聖ゾシマス

(10) ビザンティン時代の典礼との関係、用法については以下参照。R.F. Taft, "Byzantine Communion Spoons: A Review of the Evidence," *DOP* 50 (1996), 209-38.

「誕生」と相對して、「受胎告知」のマリアに隣接する南壁には「聖母神殿奉獻」が配される【図14】。左側に「(エルサレム神殿の) 至聖所 *hagia ton hagion*」⁽¹²⁾を示す腰壁が描かれ、手前に祭司ザカリアが腰をかがめ、3歳のマリアを受けとろうとする。至聖所に歩むマリアは、大人の半分の背丈である。マリアの背後では両親ヨアキムとアンナが両手を挙げて、神を讃えている。両親の背後には、目くらし役を務める7人のヘブライの乙女が、火のついた蠟燭を手に並ぶ。本来なら乙女らの背後に両親がいるべきであるが、両者が入れ替わった描写をとる作例は少なくない。ザカリアの背後、至聖所の高いところにはマリアが坐し、天使から食べ物を受けとる。天使が手にするのは、剥落はなはだしいが、パンであるようだ【図15】。マリアは祭壇の3段目にい



図13 ベーマ、聖母の誕生



図14 ベーマ、聖母神殿奉獻



図15 聖母神殿奉獻細部、天使に養われるマリア

(11) マリア誕生をのぞき見るヨアキムの描写は、たとえばコーラ修道院参照。P.A. Underwood, *The Kariye Djami*, New York 1966, vol.1, 66-68.

(12) この図像「聖母神殿奉獻」には、*hagia ton hagion* (至聖所) もしくは *eisodia tes Theotokou* (テオトコスの入場) という銘が付される。

るように見え、典拠である「ヤコブ原福音書」の記述に忠実である（7：3）。「ヤコブ原福音書」に人数は示されないが、ヘブライの乙女を7人描くのも、ビザンティン図像学の定型である。通常「聖母神殿奉献」は、祭壇を右に配し、幼いマリアが右に進むのが定型であるが、構図を左右逆にすることによって、マリアの進行方向を聖堂自体のオリエンテーションに一致させた。加えて「天使に養われるマリア」を「受胎告知」の聖母の近くに置くことになる。この区画を囲むアーチには聖人のメダイヨンが4つ並んでいるが、うち一つは「ヤコブ原福音書」の著者「主の兄弟ヤコブ」である。

装飾プログラムの分析

聖人のイコン的単独像を除いて、聖域の図像を略述した。アシヌウは聖母マリアに捧げられた聖堂であり、聖域にマリア伝から2場面が選ばれている。ナオス西壁扉口上には大きく「聖母の眠り」が描かれているから、計3場面によって聖母マリアの生涯を表象していることになる。12世紀のビザンティン聖堂を概観すれば、ネレヅィの聖パンテレイモン聖堂（北マケドニア、1164年）はナオス西壁に「聖母誕生」「聖母神殿奉献」と「聖母の眠り」（剝落）の3場面を描く。正教の教会暦で祭日をもつ聖母の事蹟はこの3つであり、これによって聖母の生涯とするパターンは一定の普及をみたものと思われる。順に9月8日、11月21日、8月15日が祭日で、朝課、^{オルトロス}奉神礼を含む長い典礼によって祝われる。聖母伝を長いサイクルで描く⁽¹³⁾のではない場合、この3場面の選択自体は順当であるが、うち2場面を聖域内に配する作例は稀である。

「聖母神殿奉献」のみを聖域に描くプログラムは、クレタ島の後期聖堂には珍しくなかった。Rethymnon 県 Amari 市 Vathiako 村、Agiος Georgios 聖堂は、聖城南壁に「キリスト神殿奉献」、北壁に「聖母神殿奉献」を配している⁽¹⁴⁾。両主題は日本語で「神殿奉献」、英語でも Presentation to the Temple が共通するので、対置されてもおかしくなく見える。しかしギリシア語で前者は Hypapante、後者は Hagia ton hagion（もしくは Eisodia tes Theotokou）なので、主題名自体に共通要素がある訳ではない。幼児がシナゴークに入り、神に捧げられるという意味内容上の共通性から、ここに対置されたものであろう。これが装飾プログラム上の定型ではなかったことは、クレタ島の他の聖堂から判断できる。レティムノ県 Selli 村、Agiος Ioannes Evangelistes 聖堂では、聖城南壁に「聖母神殿奉献」、北壁に「冥府降下」と「携香女（キリストの墓を訪れる聖女たち）」を描く⁽¹⁵⁾。同県 Amari ダム北山中 Panagia Eleousa 聖堂では聖城南壁に「聖母神

(13) ビザンティン聖堂における聖母伝サイクルについては、以下の拙稿参照。「聖母マリア伝図像の東西」『西洋中世研究』10 (2018), 7-26.

(14) I. Spatharakis, T. van Essenbergh, *Byzantine Wall Paintings of Crete, vol.3, Amari Province*, Leiden 2012, no.34; K. Gallas, K. Wessel, M. Borboudakis, *Byzantinisches Kreta*, München 1983, 311; M. Bissinger, *Kreta. Byzantinische Wandmalerei*, München 1995, no.36/117; A. Lymberopoulou, R. Duits (eds.), *Hell in the Byzantine World*, vol.2, Cambridge 2020, no.72.

殿奉献」、北壁に「冥府降下」、同県 Myrthios 村 Sotir Christos 聖堂は聖域南壁に「聖母神殿奉献」、北は不明⁽¹⁶⁾、同県 Prasses 村 Panagia 聖堂は聖域北壁に「聖母神殿奉献」、南に「エジプト逃避」⁽¹⁷⁾、イラクリオ県 Sklaverochori 村 Panagia 聖堂は聖域北壁に「聖母神殿奉献」、南は剥落して不明⁽¹⁸⁾。以上挙げた作例は網羅的でなく、偶々私の眼に触れたに過ぎないが、ここからわかるのは「聖母神殿奉献」を聖域に配するのは珍しくなかったこと、ただし南壁北壁に原則はなかったこと、そして対置する図像に定まったパターンはなかったこと、である。

詳細にマリア伝を語る12世紀の作例として、ジョージアのアテニ・シオニ Ateni Sioni 聖堂⁽¹⁹⁾、プスコフのミロジュ Mirozh 修道院⁽²⁰⁾、ノヴゴロドのミャチノ Myachino 湖畔アルカジ Arkazhi 村受胎告知聖堂（1189年）⁽²¹⁾等を挙げることができよう。ビザンティンからロシア圏への、聖母伝図像伝播の実態は不明であるが、アテニ・シオニは三葉形の聖堂の一面、ミロジュは南西隅礼拝室、アルカジはプロテシス（北小祭室）に幼いマリアの物語を描いている⁽²²⁾。いずれも基本的に「ヤコブ原福音書」の記述に従うが、どの逸話を採るかに原則はいまだ定まっていなかったように見える。

アシヌウの聖堂で最も特異な図像選択は、アプシス左右に「エジプトの聖マリアの聖体拝領」を描いたことである。悔悛し、祈りの生活を送った点では修道士の手本となるが、アレクサンドリアの元娼婦の姿を聖域に描くのは異例のことであった。今日でも正教会は、女性が聖域に立ち入ることを許さない。

この図像の定型配置は、聖堂扉口の左右にマリアとゾシマスとを分割して描くものである。西扉口に限らず、南北の副次的な扉口に描かれることも少なくない。アシヌウに近い時期の作として、キプロス島ラグデラ Lagoudera のパナギア・トゥ・アラコス Panagia tou Arakos (Panagia Arakiotissa) 聖堂（1192年）⁽²³⁾を挙げる。南扉口の左右にマリアとゾシマスを配する【図16】。扉口上部のメダイオンは聖クリストフォロスで、エジプトのマリアとは関係ない。マリアの顔の三分の二は失われているが、白髪、鰓が張り先の尖った顎、偏袒右肩で裾の短い衣、全身を覆う体毛

(15) I. Spatharakis, *Dated Byzantine Wall Paintings of Crete*, Leiden 2001, 163; I. Spatharakis, *Byzantine Wall Paintings of Crete, vol.1, Rethymnon Province*, London 1999, no.20; *Byzantinisches Kreta*, 270; Bissinger, *Kreta*, no.186; K. Kalokyres, *The Byzantine Wall Paintings of Crete*, New York 1973, 36, 44; *Hell*, no.70.

(16) I. Spatharakis, *Byzantine Wall Paintings of Crete, vol.4, Agios Basileios Province*, Leiden 2015, no.22; *Hell*, no.66.

(17) Spatharakis, *Crete, vol.1*, no.16; *Byzantinisches Kreta*, 270; Kalokyres, *Crete*, 39.

(18) *Byzantinisches Kreta*, 395; Bissinger, *Kreta*, no.222; Kalokyres, *Crete*, 40.

(19) T. Virsaladze, *Росписи Атенского Сиона*, Tbilisi 1984; D. Mouriki, "Observations on the Style of the Wall Paintings of the Sion Church at Ateni, Georgia," rep. in: *Studies in Late Byzantine Painting*, London 1995, 443-71.

(20) V. Sarabianov, *Transfiguration Cathedral of the Mirozh Monastery*, Moscow 2002.

(21) T.Y. Tsarevskaya, *Фрески церкви Благовещения на Мячине («в Аркажах»)*, Novgorod 1999.

(22) 前掲拙稿「聖母マリア伝図像の東西」の表を参照。



図16 ラグデラ、パナギア・トゥ・アラ
コス聖堂、南扉口

はアシヌウとよく似ている。ゾシマスの^{コクリアリオン}聖体スプーン
の先端が臘脂色の画面枠にかかっている描写もアシヌ
ウと同様である。ラグデラの画家はコンスタンティノ
ポリスのテオドロス・アプセウデイスとわかっており、
首都の手本を持参していたはずであるが、あえてアシ
ヌウに倣ったのかも知れない。そうだとすると、聖域
にこの図像を配することはしなかった。扉口左右の配
置は、多くのビザンティン、ポスト・ビザンティン聖
堂で採用されている。

ローマのサンタ・マリア・アンティクァ聖堂に、最
初期のエジプトのマリア図像が残っているが、プログ
ラムを論ずることはできない⁽²⁴⁾。カッパドキアにも、
扉口左右でない初期のエジプトのマリアがいくつか
残っている。ウフララ Ihlara 地区ユランル・キリセ
Yılanlı Kilise、南の葬礼用小礼拝堂（ナルテクスの機

能を兼ねる）南壁には左から「エジプトのマリアに聖体を与えるゾシマス」「マリアを埋葬する
ゾシマス」「エジプト逃避」が並ぶ。舞台がエジプトである、との共通性をもって配置したもの
だろうか。同じくウフララ（ベリスルマ）のアラ・キリセ Ala Kilise では、南西隅区画の天井、
ヴォールト北側に「燃える炉の中の三人の少年」、南側に「エジプトの聖マリア」2 場面（裸の
マリアに衣を与えるゾシマス、マリアに聖体を与えるゾシマス）が描かれている⁽²⁵⁾。

アシヌウと比較考察されるべきは、ギョレメ Göreme 地区第7番トカル・キリセ Tokalı Kilise
新聖堂（10世紀半ば）であろう。3 アプシスを有し、主アプシスには「磔刑」他、受難・復活サ
イクルを配する特異なプログラムをもつ聖堂であるが、エジプトのマリアが描かれているのはブ
ロテシス（北小祭室）のアプシス・コンク下部である。コンクには二大天使・セラフィム・ケル
ビムに囲まれる「^{マイエスタス・ドミニ}莊嚴のキリスト」が君臨する。フリーズ状になったコンク下部には左から「天

(23) D. and J. Winfield, *The Church of the Panaghia tou Arakos at Lagoudhera, Cyprus: The Paintings and Their Painterly Significance*, Washington, D.C. 2003; A. Nicolaïdes, "L'église de la Panaghia Arakiotissa à Lagoudera, Chypre. Etude iconographique des fresques de 1192," *DOP* 50 (1996), 1-137; 益田朋幸『ビザンティンの聖堂美術』中央公論新社、2011年。

(24) J. Wilpert, *Die römischen Mosaiken und Malereien der kirchlichen Bauten vom 4. bis zum 13. Jahrhundert*, Freiburg 1916, pl.227-2.

(25) クレタ島 Lassithi 県 Ierapetra 市 Agios Georgios 村 Agios Georgios 聖堂（14世紀、Byzantinisches Kreta, 440）南扉口には、左右に「エジプトの聖マリアの聖体拝領」、上部リュネットに「燃える炉の中の三人の少年」が描かれている。地域も時代もカッパドキアとは離れているが、二つの主題の連結には何らかの意味があったのだろう。

使と悪魔の対話」「エジプトの聖マリアの聖体拝領」「アブラハムの饗宴」と5人の修道聖者が描かれている⁽²⁶⁾。「天使と悪魔の対話」は類例のない特殊な図像で、ここでは触れない。「エジプトの聖マリアの聖体拝領」が「アブラハムの饗宴」と並置されているのは、ここが聖体準備室^{プロテシス}であるであることを思えば、納得できる。「饗宴」は聖体のパンを予型する主題だからである。副祭室とはいえ、トカルは聖域に「エジプトの聖マリア」を聖餐との関わりで描いた。

地方の後期の作例ではあるが、エジプトのマリアを聖域に描く聖堂が、私の知る限りもう一つある。ペロポネソス半島イェラーキ Geraki の聖ニコラオス Agios Nikolaos 聖堂（14世紀）である⁽²⁷⁾。単廊式バシリカを二つ連ねたダブル・チャーチであるが、北聖堂のみにフレスコが残る。建築本体と同時に築造された石造イコノスタシスが現存し、王門右（南）には坐像のキリスト、左（北）には坐像の聖母子が描かれている。その裏面、聖職者のみ目にすることができる場所に「エジプトの聖マリアの聖体拝領」が配されるのである（マリアが左＝南、ゾシマスが右＝北）。この図像配置の意図を推測するのは難しい。これを見ることのできた聖職者へのメッセージだとするなら、女性救済を促すものであろうか。あるいは司祭の権能を強調するものだろうか。

エジプトのマリアは砂漠の修行者であり、悔悛という性格を強くもつ。単独のイコン的図像として採用されるより、聖ゾシマスとともに「聖体拝領」として描かれる場合が多かった。9～10世紀のカッパドキアには、複数場面の小さなサイクルが残っている。「聖体」を表象する主題として、トカル新聖堂ではプロテシスのアプシス下部に描かれた。アシヌウは副祭室ではなく主祭室にエジプトの聖マリアを描く、というさらに大胆な試みをしている。左右に分割配置する構図については、12世紀以降私たちは頻繁に目にするため、違和感をもたないが、聖堂扉口左右への配置が先行して、アシヌウはアプシス左右にこれを応用したのであろうか。ゾシマスが聖体スプーン^{コクリアリオン}にパンの欠片を載せてマリアに差出す。聖堂扉口左右に配した場合、私たちはこの間を通り抜ける。通り抜ける行為は、あたかも「聖体拝領」を邪魔するかのようである。しかしアプシスの左右に配するなら、その中央には現実の祭壇があり、聖体のパンが祭壇上を通過することになる。つまり分割構図は、聖堂扉口よりもアプシス左右に配する方が理にかなっており、図像学的に意味をなすのである。聖域に聖母マリア以外の女性を描くのはきわめて異例のことであるが、「聖体拝領」という行為をここに描くのは意味がある。現存する作例数からいえば扉口左右が圧倒的多数であるが、アプシス左右という特殊例が先行した可能性を考えてもよいのである。

パンの主題

アシヌウの聖域プログラムを記述、検討してきた。「受胎告知」のマリアの周囲には、パンを

(26) A. Wharton Epstein, *Tokali Kilise. Tenth-Century Metropolitan Art in Byzantine Cappadocia*, Washington D.C. 1986.

(27) N. K. Moutsopoulos, G. Dimitrokallis, *Γεράκι. Οι εκκλησίες του οικισμού*, Thessaloniki 1981, 47-73.

描く主題が集中していることに気づく。左に接するのは「使徒の聖体拝領」、マリアにいちばん近い場所に裏切り者のユダがいて、パンを口に入れながらイエスに背を向けている。あたかもマリアに向かって進んでくるかのようなのである。下に接するのは「エジプトの聖マリアの聖体拝領」の聖ゾシマスで、聖体スプーンにパンを載せ、前方に差出している。右に接するのは「聖母神殿奉獻」で、「受胎告知」のマリアの頭部に近い位置には「天使に養われるマリア」モチーフがあり、天使からパンを受けとる。「受胎告知」のマリアに接する三方に、パンの主題が集中する。これは偶然ではなく、熟考された装飾プログラムである、と考えるのが私の立場である。「聖体拝領」にユダを加えるのは稀な図像である。「エジプトのマリア」を主アプシスに描く例は他にない。「聖母神殿奉獻」を聖域に配するのは、クレタ島の後期小聖堂のみに見られる現象であった。「受胎告知」のマリア周囲の3主題は、いずれも例外的で、プログラム上の意図をもって配置されているのである。

「パンの3主題」の意味を考えるために、今少し、「天使に養われるマリア」の意味を論じなければならない。「聖母神殿奉獻」の上部に「天使に養われるマリア」のモチーフを描くのは、この図像の定型である。3歳で神殿に捧げられた後、「マリアは、主の神殿で鳩のように保護されて、天使の手から食物を受けとっていた」（ヤコブ原福音書8：1）。通常の図像では、天使はパンを持った手をマリアに向けて伸ばすのであるが、先に触れたイェラーキには天使がパンと葡萄酒の壺を手にする作例が複数残っている。最も古いのはエヴァンゲリストリア Evangelistria で、聖ソゾン Agios Sozon、聖アタナシオス Agios Athanasios、聖ヨハネ・クリソストモス Agios Ioannes Chrysostomos もこれを踏襲した⁽²⁸⁾。

3歳の幼児に葡萄酒を与えるのは奇妙でもあるが、図像学上の意義は聖アタナシオス聖堂の配置に明らかである。坐像の聖母子と二大天使を描くアプシスの左右、ペーマ北壁（左）に「聖母神殿奉獻」、南壁（右）には「最後の晩餐」が配されるのである。「最後の晩餐」はもちろんイエスがパンと葡萄酒を弟子たちに与え、「聖餐」の教義が制定される主題である。その対面では、幼いマリアが天使からパンと葡萄酒を受けとっている。すなわち「天使に養われるマリア」のモチーフは、「聖餐」の予告であり、3歳の少女に対して天使は、将来あなたが生む子は神に対する犠牲として捧げられる、という苛酷な宿命を告げるのである⁽²⁹⁾。

「受胎告知」の聖母の周囲に、パンの主題3点を配したプログラム考案者の意図は明らかであろう。すでに3歳において、マリアは天使から、将来の我が子の運命をパンによって教えられて

(28) この部分は前掲拙著『ビザンティン聖堂装飾プログラム論』第18章と重複する。Moutsopoulos, Dimitrokallos, *op.cit.*

(29) J. Olkinuora, "Four Typological Images of Mary in the Hymnography for the Feast of the Entrance," *Journal of the International Society for the Orthodox Church Music*, 1 (2014), 33-42, esp.40 は特に典礼文においてマリアが ἄρτος ζωῆς (命のパン)、ζωῆς τοῦ ἁγίου τράπεζα (命のパンの祭壇) と呼ばれることから、天使がマリアに与えるパンを聖餐と結びつけて論じている。

いた。そしてユダの裏切りによって、イエスの受難は成就する。ユダはイエスの手からパンを受けとったにもかかわらず、イエスに背を向けて去った。マリアの哀しみと引き換えに、人類の贖罪は成し遂げられた。元娼婦であったエジプトのマリアですら、パンを与えられて救済される。パンはユダにとって裏切りのパンであり、聖母マリアにとって哀しみのパンであり、人類、とりわけて女性にとっては救いのパンであった。

アシヌウのペーマの、パンを巡る装飾プログラムが、この地で新たに考案されたとは考え難い。おそらく首都コンスタンティノポリスの、聖母に捧げられた小規模の聖堂で行なわれていた図像配置を、画家がキプロスにもたらしたものであろう。「聖母神殿奉献」は構図の左右こそ通常と逆であるが、図像学的な特異点は見出せない。しかし「使徒の聖体拝領」のユダと、「エジプトの聖マリアの聖体拝領」は、このプログラムのために考案、ないし改変された可能性がある。

「使徒の聖体拝領」は向かって左の、ペテロを先頭とする側がパンで、右のヨハネを先頭とする側がワインである。したがって、パンを口にして立ち去るユダは、向かって左の弟子たちの中にいなければならない。しかしあえてユダは右端に描かれ、しかも「使徒の聖体拝領」と「受胎告知」が同じ高さのフリーズに配されているので、ユダはイエスに背きつつ、あたかもマリアに向かってゆくかのごときである。「エジプトの聖マリアの聖体拝領」では、ゾシマスがエジプトのマリアに聖体のパンを与えるのであるが、通常「与える」側は西洋美術では向かって左に置かれ、「受けとる」側は右である。これを逆配置にすることによって、パンを手にするゾシマスが「受胎告知」の聖母に接することとなった。後代の「エジプトの聖マリアの聖体拝領」でも、ゾシマスが右にいる場合が多い⁽³⁰⁾。砂漠の修道聖女の「聖体拝領」として、説話的に成立した図像が、中期ビザンティンのおそらく首都で、例外的に聖域に配され、特異なプログラムを構成することとなった。それが、「右側のゾシマス」含めて伝播して、各地に広がることになったものと思われる。

奉献銘文と寄進者

アシヌウの寄進者であるニキフォロス（・イスキリオス）の名は、アプシス下に部分的に残された銘文と、ナオス西側「コンスタンティヌスとヘレナ」上部の銘にも現れるが、より長文の奉献銘が南壁、扉口上の半ドーナツ形壁面に記されている。この壁面は14世紀に描き直された寄進画であるが、銘文の内容から、当初の銘文を写していると考えられる⁽³¹⁾。

(30) 同じくキプロス、12世紀のラグデラも、同じく聖域内に配されるイエラーキ、聖ニコラオスも、ゾシマスが向かって右である。「エジプトの聖マリアの聖体拝領」の先行作であるカッパドキア、ウフララ（ベリスルマ）のアラ・キリセやユランル・キリセでは、ゾシマスは順当に左である。

(31) Sacopoulo, 10-11; N.P. Ševčenko, in: *Asiou Across Time*, 77-80; A. Rhoby, *Byzantinische Epigramme auf Fresken und Mosaiken*, Wien 2009, 348-50, no.236. フレスコに関する問題は A.W. Carr, in: *Asiou Across Time*, 291-98.

右方に寄進者ニキフォロスが聖堂の雛形を手にし、頭二つ大きな聖母が聖堂の屋根に手を置きつつ、ニキフォロスを左方のキリストに導く。左ではキリストが玉座に坐し、右手を延ばして祝福する。その後方には天使の群れが控えている。構図中央、聖母とキリストの間には、韻文の銘が7行記される。

多くの善きことによって生を嘉せられ
それは処女よ、汝が与え給いしものなりしが
マギストロスたる（我）ニキフォロスは憐れな嘆願者として
祈りとともにこの御堂を建てし
そをもって汝が、我が庇護者たらんことを願い奉る
畏怖すべき裁きの日に

ニキフォロスの背後には、その半分ほどの背丈の女性が嘆願の仕種で立ち、その上部には「12月、第7インディクティオ、第15日、（世界年）6608年 [= 西暦1099/1100年]、神の婢イエフィラ Gephyra 眠る」の銘が記される。先の銘が韻文であったのに対して、こちらは単純な墓碑銘の形式をとる。堂内もしくはその周辺にイエフィラの墓があったのかどうかは、不明である。1099/1100年との年記は、14世紀にこの銘文を写した画家の誤記であり、イエフィラの歿したのは1106年12月15日、聖堂完成直後のことであったと見なされる⁽³²⁾。ニキフォロスは聖母に聖堂を寄進し、フレスコによる装飾も終えた直後に、妻もしくは娘のイエフィラを喪った。それを悼んで、寄進図の余白に彼女の姿と墓碑銘を記したのであろう。

アシヌウのベーマ装飾には、明らかに女性救済の意図が見られる。男性パトロンがそれを企図してもいっこう構わない訳ではあるが、プログラムにイエフィラの意味が働いていた、と想像することも許されるだろうか。彼女が急逝したのではなく、長く篤い病床に就いていたなら、死ぬ前にゾシマスから聖体を受けて救われたエジプトのマリアを描くのは平仄に合うが、空想はもはや論文の領域ではない。

「受胎告知」の聖母マリアの周囲に配された、3つのパンの主題を巡る解釈は、以上である。ここで稿を閉じてよいのだが、最後に「受胎告知」の聖母について若干加えよう。先に記述した通り、マリアの紡^{つむ}錘には糸が巻きついておらず、左手に持つ布もしくは糸の束は二つ折りにされている。他に類例を見出せないこの図像学的細部が有意であるか、私は今のところ確定的な意

(32) C. Mango, "Chypre, carrefour du monde byzantine" (1976), rep.in: *Byzantium and its Image*, London 1984, art.17, 7 n.14; G. Grivaud, in: *Asinou Across Time*, 22-23; A. Papageorgiou, in: *ibid.*, 53-54; Carr, in: *ibid.*, 293, 297.

見を述べることができない。暫定的にここで「受胎告知」図像一般として論ずるなら、この聖母にも「パン」の含意が関わっているのである。以下、教父の言説を博搜したエヴァンゲラトウの議論に従う⁽³³⁾。

マリアがガブリエル訪問の際に紡いでいた糸は、神殿の垂れ幕^{カーテン}を織るためのものであった。神殿のカーテンは多くの教父によって、キリストの（特に人性の）予型^{テュポス}と見なされ、マリアの紡錘はしたがって受肉の象徴となる。エヴァンゲラトウはさらに進んで、紡錘の軸受けを、神の器たる処女の子宮の象徴と見なすが、今の私たちがそこまで考える必要はない。むしろ聖母の軸受けと聖ゾシマスの聖体容器、聖母の紡錘とゾシマスの聖体スプーンの、形態上の対応を指摘すべきであろう【図8、12】。

軸受けが大振りに表され、そこに羊毛を染める赤い⁽³⁴⁾染料が入っている「受胎告知」作例もあり、赤い液体の入った容器は聖杯^{カリス}を予型するとも見なされよう⁽³⁵⁾。しかしアシヌウのゾシマスが赤い布で左手を覆って持する聖体容器は、マリアの腿の上の軸受けと類似する。加えて、二人は右手に白い棒状のもの（マリア：紡錘、ゾシマス：聖体スプーン^{コクリアリオン}）を持っている。マリアの紡錘に、通例と異なり糸が巻きついていないのは、聖体スプーンとの類似性を強調するためであった、と考えるのがこの例外的なモチーフの意味に関する、一つの解釈である。ゾシマスが聖体容器からスプーンでパンをとり出すように、マリアは軸受けから紡錘によって、神殿のカーテン、すなわちキリストの体たるパンをとり出すのである。しかしこれは、教父の説教等の傍証のない解釈に過ぎない。ビザンティン画家は、教父の連想解釈に触発されて図像を生成することが多い——つまり教父の言説を傍証として提出すれば、図像解釈が説得力をもつ——が、一方で、教父のテクスチュアルな言説には拠らない、形態の類似のみによって成立する装飾プログラムがビザンティン世界には存在することも忘れてはならない⁽³⁶⁾。

教父の説教において、神殿のカーテン（布 *καταπέτασμα* の語が用いられる）は、聖母マリアのヴェールや *Aër*（*Ἄηρ* アイル：祭壇上の聖体皿^{パテナ}と聖杯^{カリス}を覆う布）といった種々の布に敷衍され、キリスト受肉と関連づけて論じられる⁽³⁷⁾。「受胎告知」の聖母の周囲に配された3主題には、明確に「パン」というモチーフが描かれていたが、マリア自身には「パン」そのもののイメージは直接に表象されていない。しかしビザンティン人の心性において、マリアが織り出そうとして

(33) Evangelatou (n.8), 261-79.

(34) 「ヤコブ原福音書」では、マリアに指定された垂れ幕の色は「真紫と深紅 *ἡ ἀληθινὴ πορφύρα καὶ τὸ κόκκινον*」（10：2）とされており、教父の説教では高貴な色である紫が強調される傾向があるが、美術作品では紫の鮮やかな表出が難しいこともあって、ややくすんだ赤系統の色彩で表現されることが多い。

(35) Evangelatou, 267-68.

(36) たとえば拙稿「聖母伝の視覚的予型論——ストゥデニツァ修道院（セルビア）の「王の聖堂」』『聖堂の小宇宙』（ヨーロッパ中世美術論集4）竹林舎、2016年、351-75。

(37) *St. Germanus of Constantinople. On the Divine Liturgy* (trans. P. Meyendorff), New York 1984, 88-91.

裏切りのパン、哀しみのパン

いる布は、神殿のカーテン＝キリストの体であり、祭壇上で聖体のパンを覆う布でもあった。パンに生涯関わり続けたマリアを、このような図像連結によって表象したビザンティン画家の工夫は、教父の説教に劣らず雄弁である。

【後記】 本論文は JSPS 科研費22H00621の助成を受けたものである。

【図版出典】 図9：P.L. Vocotopoulos, *Βυζαντινές εικόνες*, Athens 1995, fig.49.

上記以外はすべて著者撮影、作成